花業界を目指し奮闘の日々

園芸別科　花卉専攻２年
土　田　耕　一

私がこの原稿を執筆している８月下旬の実習では、パンジー・ビオラの播種、シクラメンの葉組みなどのメニューが組まれています。今年は高知県四万十市で観測史上最高気温の41℃を記録するなど、厳しい暑さが続いていますが、私たち別科の学生は猛暑にも負けず実習に励み、様々な技術を学んでいます。

別科花卉専攻は「花組」と呼ばれています。それでは本年度の花組の構成を紹介します。２年生が８名(私を含め社会人経験者２名)、１年生が２名の総勢10名です。農業高校出身者や実家が生産者で、すでに植物に親しんでいる人から、全く未経験の人まで、バックグラウンドも年代も異なる様々な人が同じ専攻に学んでいます。

入学してまず教わるのが灌水当番です。1000属ハウスともう１つのビニールハウスをローテーションで管理するのですが、たかが灌水と侮れない大切な作業です。灌水の加減には個人差があるので、皆が均一にできることが必要ですし、花の種類もサボテン、多肉、ラン等、様々な種類があるので、過湿になっていないか、換気は大丈夫かなど、慣れるまで時間がかかります。そして灌水作業に慣れるころには、こんどは植物の状態を確認したり、名前を覚えるためラベルを見るようになったりして、自然とハウスにいる時間が長くなっていきます。

花の名前を覚えるのは1000属検定のためです。花組では1000属検定のＣ級を別科修了までに取ることが目標になっています。Ｃ級は花業界で働くのに最低必要なレベルとされています。属名をラテン語のスペルまで覚えるのはたいへんで最初は面食らいますが、人付き合いにおいても相手のことを知りたかったら、まず名前と顔を覚えることから始まります。花の場合も同様で、Ｃ級を取ってやっと、植物のことを本当によく知るためのスタートラインに立ったといえるでしょう。

別科のコースは花産業で働くエキスパートの育成が目標ですので、カリキュラムも実習が中心となっています。柏の葉フィールド科学センター花卉・苗生産部の年間スケジュールに沿って、基礎の栽培法から高度な応用技術まで、実際に植物を育てながらの実習が行われます。実習でほんの一部に関わっただけとはいえ、自分の手の加わった植物が、実際の商品としてお客様の手に渡るので、将来の生産者としての喜びをちょっとだけ疑似体験できます。

一例をあげると、母の日用のペチュニアの大鉢はＴＶショッピングで販売され、挿し芽からピンチ、葉かきと一連の工程を学びます。趣味の園芸ではとてもできない大胆な刈り込みに最初はびっくりさせられます。もちろんこれは分枝の位置や仕上がりのボリュームを想定したうえでのことです。また、花壇苗は六本木など人目につく場所での植栽に使われたり、時には市場出荷されることもあります。　さらに、11月に行われる戸定祭では自分たちで育てた苗の販売もします。ここでは品目選びから価格設定まで、生産現場に出れば当然直面する事柄を、自分たちで話し合い、決めていきます。先生や技官さんにアドバイスを頂き、ＯＢの方々に植物の提供を頂くなど、たくさんの方々の力を借りるこの最大のイベントを、是非成功させたいと思います。

２年生は戸定祭が終わると修了論文が待っています。先輩方の論文に圧倒され、果たして自分にもできるのかと心配しながら各自テーマを決め、実験に取り組んでいます。生きもの相手なので思うようにいかないことも多く、時間はあっという間に過ぎてゆきます。ずっと前に漠然とした大学生活を送ってしまった私にとって、改めて送る別科での学生生活はとても充実しています。卒業後も植物と関わっていこう、そう思う今日この頃です。

実習風景（左列奥が著者）